

日本の産業界は単品の技術で勝っても、大量生産の技術になると海外勢に負けてしまふ事例が目立つ。洋上風力の研究に長年携わってきた東京大学大学院工学系研究科の石原孟教授は、いかにコストを掛けずに大量に早く造ることができるかが、洋上風力発電事業の鍵になると説く。実践で確立した技術は海外市場での差別化につながると期待を込める。

再生可能エネルギーの洋上風力に注目が集まる。

「エネルギー問題に本気で取り組むなら洋上風力事業を立ち上げるべきだと主張してきた。事業促進には四つの施策が不可欠。まず研究開発は、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）らが実

風をつかむ

洋上風力の未来

第1部 識者の視点 ▶▶▶▶▶ 11

東京大学大学院工学系研究科

石原 孟教授



大量生産・低コスト化技術確立を

にある。洋上風力をアッシュの自然・地質環境といった条すると国が決心し、民間の投資が難しいところを解決すれば資意欲が一気に高まった。日ば、世界の洋上風力市場に日本は事前準備もあるから、欧来打って出る時にも役立つ。州よりは事業がもう少し速く進むだろう」

——技術面での課題は。「日本では着床式の実証研究が09年ごろから国主導で進められている。日本に優れた技術はあるが、短期間で大量に造る技術開発はあまりやっていない。

証を重ねながら進めてきた。められた。大きな問題は台風と地震。実証研究などを通じて国際基準の制定に積極的に関わってきた。台風対応では「クラスT」という国際規格ができた。海外メーカーが風車を持ってくる時は、

「先行する欧州は20年前から洋上風力に取り組んできたが、明確な目標ができて本気で始めたのは約10年前。個人的に見れば、着床式は10年ほど遅れて欧州の当時の熱気が、今の日本に感じられる。浮体式は日本も欧州と同レベルの事業化だ」

「先行する欧州は20年前から洋上風力に取り組んできたが、明確な目標ができて本気で始めたのは約10年前。個人的に見れば、着床式は10年ほど遅れて欧州の当時の熱気が、今の日本に感じられる。浮体式は日本も欧州と同レベルの事業化だ」

「先行する欧州は20年前から洋上風力に取り組んできたが、明確な目標ができて本気で始めたのは約10年前。個人的に見れば、着床式は10年ほど遅れて欧州の当時の熱気が、今の日本に感じられる。浮体式は日本も欧州と同レベルの事業化だ」

「先行する欧州は20年前から洋上風力に取り組んできたが、明確な目標ができて本気で始めたのは約10年前。個人的に見れば、着床式は10年ほど遅れて欧州の当時の熱気が、今の日本に感じられる。浮体式は日本も欧州と同レベルの事業化だ」

「先行する欧州は20年前から洋上風力に取り組んできたが、明確な目標ができて本気で始めたのは約10年前。個人的に見れば、着床式は10年ほど遅れて欧州の当時の熱気が、今の日本に感じられる。浮体式は日本も欧州と同レベルの事業化だ」

「先行する欧州は20年前から洋上風力に取り組んできたが、明確な目標ができて本気で始めたのは約10年前。個人的に見れば、着床式は10年ほど遅れて欧州の当時の熱気が、今の日本に感じられる。浮体式は日本も欧州と同レベルの事業化だ」

（定）